九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代中国語の自然会話における推意について

劉, 驫
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/4777912

出版情報：言語科学. 57, pp.1-13, 2022-03-23. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

現代中国語の自然会話における推意について

劉 驫

1. 研究背景

これまで、中国国内の関連性理論に関する研究は、主に翻訳学の分野において行われている(孔梁宇 2019、范新民 2019、曹丽英 2020、李菁菁 2020、李媛媛 2020、孙舒怡 2021 など)。関連性理論の中国語文法における応用は、崔春愛 2006, 2007、周琳 2007、龐龍傑・堀江薫 2020 以外あまり見られない。具体的には、崔春愛 2006, 2007 は中国語の副詞"也"の強調機能に注目しており、周琳 2007 は中国語接続詞の認知的役割について考察している。龐龍傑・堀江薫 2020 は、談話標識"这么说吧"と英語の定型表現 so to speak に関する対照研究を行っている。一方で、現代中国語の自然会話における強い推意(strong implicature)と弱い推意(weak implicature)について詳細な考察を行った研究は未だ見られない。そこで、本研究は自然会話における強い推意と弱い推意の使用傾向を明らかにし、関連性理論に基づいてそれぞれの解釈の過程を説明した上で、その理由について考察を行う。

2. 関連性理論における強い推意と弱い推意

Culpeper & Haugh 2014: 6-7 が指摘するように、語用論の研究には主に狭い視点を持つミクロ語用論と広い視点を持つマクロ語用論という２つの立場がある。前者は「英米的視点(Anglo-American view)」、後者は「ヨーロッパ大陸的視点(Continental European view)」と呼ばれる。ミクロ語用論において、話し手と聞き手の推論に焦点を当てた代表的な論考として、Grice1975 の「会話の含意(conversational implicature)」と Sperber & Wilson[1986]1995 の「関連性理論(relevance theory)」が挙げられる。ウィルスン & ウォートン 2009: 40-42 によると、コードモデルに基づいたコミュニケーション分析の代わりに、推論に基づいたモデルを提示したことは、Grice1975 の大きな功績といえる。一方で、「協調の原理(cooperative principle)」と「会話の原則(conversational maxims)」の起源が不明な点、理論上の用語の定義が不十分な点(特に「関連性」の定義)、解釈手順が不明瞭な点、理論の適用範囲が狭い点など、Grice1975 の理論には数多くの問題点があることが指摘されている(ウィルスン & ウォートン 2009: 51-56)。そこで、Sperber & Wilson[1986]1995 は Grice1975 の論考を発展させ、認知的に妥当で経験的に検証可能なコミュニケーション理論、つまり、関連性理論を提案した。

Sperber & Wilson[1986]1995: 125 によれば、関連性は「認知効果(cognitive effect, ある文脈において情報を処理することによって得られる効果)」によって決まるとされる。ほかの条件が同じであれば、認知効果が大きいほど関連性は大きくなり、処理労力が大きいほど関連性は小さく

なるとされる。言い換えれば、最大の関連性を持つ解釈は、高い認知効果と少ない処理労力のあるものであるとされる。

Sperber & Wilson[1986]1995: 182-183によると、表意(explicature, 「明示的意味」や「明意」とも呼ばれる)とは、明示的に伝達される想定のことであり、一方で推意(implicature, 「非明示的意味」や「暗意」とも呼ばれる)とは、非明示的に伝達される想定のことである。伝達される想定は表意か推意かのいずれかであるが、その明示性の度合いに程度の差が存在することも指摘されている。Sperber & Wilson[1986]1995: 182はこの明示性について「発話Uによって伝達される想定は、それがUによってコード化される論理形式の発展であるとき、かつその場合のみ明示的である」と定義を与えている。

Implicatureという概念はもともとGrice1975によって提唱されたものである。本稿ではGrice1975のimplicatureを「含意」、Sperber & Wilson[1986]1995のimplicatureを「推意」と呼んで区別する。Grice1975の含意は、主にSperber & Wilson[1986]1995の「強い推意」に相当するため、「弱い推意」を扱うことができないと考えられる[1)]。

ただ、Grice1975: 58は、含意には不確定なものがあることを認めている。しかし、含意となれる複数の選択肢がある場合には、その中からどれを選択するのかという問題について、グライスは言及していない。言い換えれば、Griceの理論は(1)のような強い推意(下線部)を説明できるが、(2)のような弱い推意(下線部)を十分に説明できない。

(1) ピーター: 今晩2人で外出できる?
　　メアリー: レポートを書かなければならないの。(ウィルスン&ウォートン 2009:116)

(2) ピーター: 今日何をして過ごすつもり?
　　メアリー: 疲れてるの。(ウィルスン&ウォートン 2009:117)

(1)と(2)におけるメアリーの発話は、ともに非明示的に意味を伝達しているが、関連性理論によると、(1)の下線部は強い推意とされ、(2)の下線部は弱い推意とされる。

強い推意と弱い推意は次のように区別される。ウィルスン&ウォートン 2009 :116によれば、(1)ではメアリーは直接ピーターの質問に答えていないが、ピーターはメアリーの返答から、次のような簡単にアクセスできる推意前提(implicated premise)、つまり「レポートを書かなければならないときは外出できない」を手掛かりに、「メアリーはレポートを書かなければならないので、一緒に外出できない」という推意結論(implicated conclusion)を容易に導き出すことができるとされる。このように、強い推意の場合、聞き手の関連性の期待を満たすための推意前提と推意結論が、それぞれ一つしか存在しないため、命題がどれなのかが明白である。一方で、(2)のような弱い推意の場合には、聞き手の関連性の期待を満たすための前提と結論が多数あるため、命題がど

れなのかが不明となる(たとえば、メアリーが疲れている場合、Aならしないが、Bならする。Cの場合はするかもしれないなど)。したがって、その判断は聞き手にゆだねられ、どのように解釈するかは聞き手の責任となる(ウィルスン&ウォートン 2009 :117)。

以上、本研究の理論的枠組み、重要な概念等について紹介した。ここからは、本研究で使用する会話データについて説明する。

3. 中国語の自然会話における強い推意と弱い推意

3.1 会話データ

本研究は現代中国語の自然会話における推意を分析するが、ここでいう「自然会話」というのは、小説の会話文、ドラマや映画などの「創作会話」を収集したものではなく、自然な環境下で録音されたもので、書き起こし(transcription)が行われ、データ化されたものである。

ネウストプニー・宮崎 2007: 18-19 が指摘するように、小説の会話文は小説家にとっての重要な道具であり、会話文を利用して主人公のパーソナリティーや意図などを表現できるとされるため、自然会話と異なる性質を持っている。また、佐々木 1993: 366 が主張するように、自然会話には真の即興性が含まれており、言い間違い、脱線、言い淀み、ねじれなどが存在するが、創作会話にはふつう含まれない。同時に、自然会話とは異なり、小説の作者が、登場人物に言わせようとしているため、創作会話のコミュニケーションが二重構造になっているとされる。このほか、同氏によれば、自然会話の参与者が背景知識、共通基盤を分かち合うことが多いのに対して、創作会話は文脈依存性が低いとされる。

3.2 観察結果

本研究は「本物の言語(real language, 石川 2012: 14)」における言語現象を分析するため、「自然会話」における推意の実例を観察した(具体的には「用例出典」を参照されたい)。その結果、約4万2千字の会話データから計31回の推意の使用例が観察された。

このことから、全体的に見れば、中国語の自然会話では推意そのものがほとんど用いられないこと、言い換えれば、表意が圧倒的に多く用いられることがわかる。また、内訳をみると、強い推意の使用が多く、計24回現れた。一方で、弱い推意の使用が少なく、7回しか現れなかった。したがって、命題がどれなのかがはっきりしない弱い推意は、中国語の自然会話においてほとんど使われていないことがわかった。

ここからは、関連性理論に基づいて強い推意と弱い推意の解釈の過程について説明する。

3.3 強い推意の解釈過程

強い推意は語用論的推論によって得られる想定のことで、表意とコンテクストとの相互作用に

よって会話参与者の共有知識から引き出される。たとえば、次の例(3)の下線部は、強い推意の典型例として挙げることができる[2)]。

(3) (S2は旅行会社のカウンターで、航空券を予約しようとしている。S1は旅行会社のスタッフである。)

S1：往返45天是3000元。

S2：我们挺多人一起订。

S1：你们几个人一起呢？

S2：4个，可能5个吧。

S1：5个是吧。那就给你减200，价钱是2800。

S2：只减200？（故敏男 2009: 39）

(S1：往復45日で3000元になります。

S2：私たち大人数で予約したいんですけど。

S1：何名様でしょうか。

S2：4人、たぶん5人ですね。

S1：5名様ですね。それでは200元割引をいたしますので、お値段は2800元になります。

S2：たったの200元？）（同上）

S2の発話"我们挺多人一起订(私たち大人数で予約したいんですけど)"は、S1が「大人数で予約すること」に関する百科事典的情報を共有知識から引き出すよう仕向けている。そして、S1はS2の発話が関連性を保証していると想定し、より小さい処理労力を利用してそれに見合う関連性のある解釈を得るために推論を始める。すると、「大人数で予約する場合、割引が効くことがある」という百科事典的情報が引き出される。そこで、S1はS2の発話の意味を発展させ、"我们挺多人一起订(私たち大人数で予約したいんですけど)"から表意(4a)を復元するとともに、百科事典的情報に関してすぐに喚起できる推意前提(4b)を利用することで、推意結論(4c)を引き出すことができるのである。

(4) a. S2たちは大人数で航空券を予約する。(復元された表意)

b. 大人数で予約する場合、割引が効くことがある。(推意前提)

c. S2たちの予約も割引が効くはずだ。(推意結論)

このような推論過程をたどることで、次の例(5)の下線部も同様に説明できる。

(5)　(S1、S2、S3、S4 は、一緒に食事をしている。)
S1：什么肉？牛肉？
S2：牛肉。
S3：嗯？猪肉吧？
S2：牛肉。
S4：这是清真。
S3：啊，忘了。(王萌 2009: 64)
(S1：何の肉。牛肉？
S2：牛肉。
S3：え、豚肉だろう。
S2：牛肉だよ。
S4：ここ、ハラールだから。
S3：あ、忘れた。)(同上)

S4 の発話"这是清真(ここ、ハラールだから)"を手掛かりに、S3 は(6a)のような復元された表意を得ることができる。次に、S3 は百科事典的情報に基づいてすぐに思いつくような想定「ハラールのレストランなので、いま食べているのは豚肉ではないはずだ」を推意前提(6b)として利用することにより、推意結論(6c)を引き出すことができると考えられる。

(6)　a. ハラールのレストランでは、豚肉を提供することはありえない。(復元された表意)
b. ハラールのレストランなので、いま食べているのは豚肉ではないはずだ。(推意前提)
c. いま食べているのは牛肉だ。(推意結論)

3.4　弱い推意の解釈過程

2 節で述べているように、推意には強さの度合いがあるとされる。上の(3)と(5)のような強い推意がある一方で、広範囲にわたる確実性の低い複数の弱い推意が伝達されることもある。弱い推意の場合、話し手が意図したものであると特定できるようなものではなく、推意を引き出す責任は、聞き手に委ねられているのである。

3.2 節を参照すると、中国語の自然会話では弱い推意の使用が極めて少ないことがわかる。ここからは、弱い推意の具体例を分析する。

まず、(7)では、S1 は店主で、S2 は顧客である。店主の S1 が連発したセールストークを聞き、さらに、S1 の"看好哪件了？(決まったか？)" に直接答えず、顧客の S2 は弱い推意"你这衣服是挺

好看的(ここの服、確かにきれいだね)”と発話し、言葉を濁した。

(7)　(S2 は S1 の店で商品を見ている)

S1：老妹，有什么要买？

S2：嗯，看看裙子。

S1：看看吧！看好给你便宜。这都是从南韩过来的。这都是精品。一样过来就一件儿。看好哪件了？

S2：嗯，你这衣服是挺好看的。(故敏男 2009: 32)

(S1：お姉さん、何を買うの？

S2：うん、ちょっとワンピースを見たいわ。

S1：いいよ。買うなら安くしてあげるよ。これ、全部韓国からの輸入品。それぞれ一着しかないよ。どう、決まった？

S2：うん、ここの服、確かにきれいだね。)(同上)

(7)の下線部に注目してほしい。この間接的な返事の漠然性を(3)と(5)の下線部と比較されたい。(3)の“我们挺多人一起订(私たち大人数で予約したいんですけど)” および(5)の“这是清真(ここ、ハラールだから)”には、聞き手の関連性の期待を満たすための推意前提と推意結論が、それぞれ一つしか存在しないため、話者が意図したものはどれなのか、すぐに特定できると考えられる。一方で、(7)の場合、S2 は意図をぼかしたままにしているため、S1 はどれか一つだけを S2 が意図したものだと判断できない。このため、(7)の下線部は弱い推意の例とみなすことができる。この場合、関連性は S1 側のコンテクストにまで拡大し、(8)のような一連の弱い推意を伝達することによって達成されると思われる(もちろん、(8a, b, c, d)に限定されない)。

(8)　a. S2 にとって、服の値段が少し高い。

b. S2 は、自分に似合う服が見つからない。

c. S2 から見れば、(韓国製ではなく)日本製がいい。

d. S2 は、もう少し時間をかけて選ぶつもり。

S1 は、S2 の発話“你这衣服是挺好看的(ここの服、確かにきれいだね)”の関連性を達成するために、その意図をより拡大された文脈において探さなければならない。服の値段に関する百科事典的情報にアクセスした場合、(8a)のような推意が得られるであろう。また、服が似合うかどうかにかかわる文脈まで拡大して解釈する場合には、(8b)のような推意が想定可能となる。さらに、もし発話時 S2 が日本製の服を着ていたら、(8c)のような推意が引き出されるかもしれない。このほか、

S1 の一連のセールストークを聞いて S2 が眉をひそめた場合、(8d)のような推意が得られる可能性もあり得る。このように、(8a, b, c, d)などのような弱い推意を推定する多くの責任は、S2 ではなく、S1 に委ねられている。とはいえ、“你这衣服是挺好看的(ここの服、確かにきれいだね)”の関連性は、(8a, b, c, d)のような一連の弱い推意によって達成されている。

もう一つ、弱い推意の具体例を見よう。(9)の下線部も弱い推意とみなすことができる。(9)の状況説明にあるように、S2 は歯科医師であるため、患者 S1 の病状に詳しいはずである。しかし、発話“最近呀，我吃东西的时候，就感觉那个...(最近はね、食事のときに、ちょっと...)”の途中で S1 は言い淀んでいるため、医師の S2 にとってどれか一つだけを S1 が意図したものだと特定できないと考えられる。

(9)　(S1 は S2 の歯科病院に来ている。S1 は患者で、S2 は歯科医師である。)
　S1：最近呀，我吃东西的时候，就感觉那个...
　S2：松了？　(王建波 2011: 26)
　(S1：最近はね、食事のときに、ちょっと...
　S2：グラグラした？)　(同上)

すると、関連性は医師 S2 側の文脈まで拡張し、(10)のように、よく見られる歯の病状に関する百科事典的情報に基づいて、(10a, b, c, d)のような一連の弱い推意が喚起されると思われる(これらの弱い推意だけに限られたことではない)。

(10)　a. 患者 S1 は、歯がグラグラしていると感じる。
　b. 患者 S1 は、歯が痛いと感じる。
　c. 患者 S1 は、歯がしみると感じる。
　d. 患者 S1 は、歯がきちんと咬み合っていないと感じる。

そこで、医師 S2 は、患者 S1 が意図したものは(10a)であると推測し、“松了？(グラグラした？)”と尋ねた。もちろん、もし S1 の顔に苦しそうな表情が表れたら、(10b, c)のような推意が引き出される可能性がある。また、患者 S1 は歯並びが悪い状態にある場合、(10d)のような推意もあり得るであろう。

先述のように、中国語の自然会話において推意はあまり用いられておらず、特に、強い推意に比べて、弱い推意のほうが非常に少なかったことが判明した。たとえ弱い推意が用いられても、ウィルスン&ウォートン 2009: 177 の例(11)のように、S2 の発話に対して S1 はさらに追及することなく、発話のターンが完結するのに対して、中国語の自然会話では(12)のように、そのままで

は完結せず、S2 は S1 の明確な表意が得られるまで尋ね続ける例が見られる。

(11) S1: 今日何をして過ごすつもり？

S2: 疲れてるの。((2)の再掲)

(12) (S1 と S2 は、結婚について話している。)

S1：嗯，我觉得介绍的还是感情有点儿…

S2：咋了？

S1：不牢固似的。(王丹丹 2010: 95)

(S1：うん、(友人や知人の)紹介で結婚した人は、やはりちょっと…

S2：どうした？

S1：(愛情が)安定しないみたいな。)(同上)

例文(12)では、下線部により、「うまく行かない」、「性格が合わない」、「愛情が安定しない」など、一連の弱い推意が引き出されると推定される。しかし、S1 は自身の発話意図を不明瞭にしたままにしているため、どれが S1 が意図したものなのか、S2 には分からない。したがって、S2 は"咋了(どうした？)"と尋ね、S1 の"不牢固似的((愛情が)安定しないみたいな)"という明示的な返答を積極的に求めた。

以上、筆者は関連性理論に基づいて強い推意と弱い推意の解釈過程について説明してきた。ここからは、さらなる考察を通してこの 2 種類の推意が用いられる理由を考察する。

4. 考察

中国語の自然会話では(13)と(14)のように、明示性の度合いが非常に高い例が多く観察される。

(13) (S1 は S2 に一緒に遊ぶよう誘っている。)

S1：呆会儿不行啊？

S2：不行，明天我必须打工，所以今天不能玩儿啦。(陳陽 2010: 132)

(S1：もう少しいてもいいじゃない？

S2：無理だ。明日バイトがあるから、今日は遊べないよ。)(同上)

(14) (S1 は S2 に洗濯物を干してほしいと頼んでいる。)

S1：帮我把衣服晾了。

S2：我不去晾，你自己晾呗！自己衣服你自己不晾谁晾啊？(陳陽 2010: 127)

(S1：洗濯物を干してもらえる？

S2：いやよ、自分でやれば。自分の洗濯物を自分で干すのは、当たり前だろう？)

(同上)

(13)と(14)では、S1 の勧誘や依頼に対して、S2 はまず直接的で明示的な返答を提示した上で、なぜ断るのかについて、明確かつ具体的な理由を併せて提示している((13)と(14)の下線部を参考されたい)。このような実例はほかにも多数ある。つまり、中国語の自然会話では表意が圧倒的多く、典型的で選好的な(preferred)言い方であるといえる。これは、聞き手がその発話は処理に値すると感じるような認知効果を達成するとともに、聞き手に余分な処理労力をかけないという最適の関連性を達成しようとする試みに起因すると考えられる。

これに対して、推意は非典型的な言い方であると考えられる。推意を行う場合には、直接的で明示的な返答が提示されず、間接的な言い方が多用される。ところが、間接的な言い方を用いると、余分に処理労力がかかることが予測できる。では、中国語母語話者はなぜ典型的で選好的な言い方を利用せず、あえて処理労力がかかる言い方を選ぶのか。その理由は、直接的な言い方では達成できないような付加的な認知効果を、間接的な言い方で達成しようとする意図に関係していると考えられる。たとえば、発話媒介行為の実現の促し(例(3)の下線部)や、発話内力の軽減(例(15)の下線部)などといった付加的な認知効果の達成によって、余分にかかった処理労力は正当化されると考えられる[3)]。

(15) (S1 の奢りで、二人はレストランを探している。"千里马"というレストランは"满满"というレストランよりも高級である。)

S1：“满满”你还不行？

S2：“千里马”。

S1：我还是从窗户跳下去吧。

S2：跳不死，跳吧跳吧。(安銀姫 2008: 61-62)

(S1：「満満」もだめ？

S2：「千里馬」。

S1：俺、やっぱ窓から飛び降りるわ。

S2：死にやしないから、どうぞ、どうぞ！) (同上)

ただし、ここで注意しなければならないのは、強い推意と弱い推意は目的が異なるという点である。本研究の調査を通して、強い推意は主に相手に理由を提示するときに用いられることがわかった。推論の負担をかけすぎないような、間接的な言い方によって発話内力の軽減や、発話媒介行為の実現を促すことができると考えられる。

一方で、直接的で明示的な返事をせず、明確かつ具体的な理由も提示しない弱い推意、言い換

えれば、聞き手に解釈の責任を委ねる言い方を使用すると、誤解を招く恐れがあると同時に、強い推意以上に聞き手に処理労力をかけてしまう可能性がある。しかしながら、このような弱い推意によって、交渉の余地があることの提示(例(7)の下線部)や、聞き手の選択権の拡大(例(9)の下線部)など、強い推意とは異なる付加的な認知効果の実現が見込まれる。とはいえ、直感的に考えても、生起数から見ても、聞き手に解釈の責任を委ねるような言い方は、中国語の自然会話においてほぼ使われないことから、選好的ではないということが明らかになった。

5. 今後の課題

本研究は現代中国語における推意に焦点を当て、とりわけ、強い推意と弱い推意の使用の諸相を明らかにした上で、関連性理論に基づいて強い推意と弱い推意の解釈のプロセスを分析した。その上で、関連性理論の観点から、強い推意と弱い推意が用いられる理由について考察を行った。最後に、本研究の今後の課題を述べる。

すでに言及しているように、関連性理論は英米的視点の語用論、つまりミクロ語用論を代表する言語理論である。ミクロ語用論は、主に話し手の意図や聞き手の推論など、言語的側面に着目しているため、社会的側面や文化的側面を扱うのに限界があると考えられる。ここまで見てきたように、中国語の自然会話では表意が圧倒的多く、典型的で選好的な言い方である。言い換えれば、少なくとも現代中国語では直接的な発話がインポライトであると認識されていない。この「直接性・間接性」と「ポライトネス・インポライトネス」との関わりについて論じる場合には、必然的に社会的側面や文化的側面にも立脚しなければならない。結局のところ、Culpeper & Haugh2014: 11 が提案した統合的語用論(integrative pragmatics)のアプローチのように、言語知識と文化背景や社会制度などについての知識が互いに関係し合うことを考慮し、より広い視点からのアプローチが必要であるといえる。

また、異なる言語行為の範疇における推意は、異なるふるまいを見せる可能性がある。目的や心理状態、強さ、適合方向性などによって、言語行為は数多くのタイプに分類されている(Searle1979: 12-20)[4)]。用例の出典を見るとわかるように、本研究の言語データには交渉、反対、依頼、断りなど、さまざまなタイプの言語行為が含まれているため、特定の言語行為のタイプにおける推意と、別のタイプにおける推意との類似点と相違点を比較することができない。この点もこれからの課題として向き合わなければならないのである。

さらに、本研究では便宜上「現代中国語」という言い方を使用しているが、Culpeper & Haugh2014: 8 が指摘するように、英語のような言語に共通のコアが存在すると仮定することは、実は極めて困難なことであるといえる。その上で Culpeper & Haugh2014: 8-9 は、英語を研究する際には数多くの変異があることを無視せずに受け入れるべきと主張している。彼らの主張は、中国語にも当てはまると考えられる(たとえば、筆者が話す中国語には、出身地の方言の特徴が多

く含まれている[5])。言いたいことは、現代中国語にはさまざまな変異が含まれていることを軽視せずに認めることが重要なのである。したがって、より幅広い視野から、「諸中国語」の語用論に正面から向き合うことは、今後の課題として取り組むべきである。

注

1) 「強い推意」と「弱い推意」については、のちの例(1)と例(2)を参照されたい。
2) 本稿ではS1、S2、S3などを使って第一話者、第二話者、第三話者などを区別して記述する。
3) Austin1962: 94-109によれば、①発話行為(locutionary act, 何かを言うという行為)、②発話内行為(illocutionary act, 何かを言うことにおいて行為を遂行すること、「発話内力(illocutionary force)」とも呼ばれる)、③発話媒介行為(perlocutionary act, 何かを言うことによって引き起こし、達成すること)は、発話の3つの異なる局面とされる。
4) 言語行為の分類については、いまだ決定的なものが現れていないが、Searle1979のほか、Austin1962, Leech1983など、さまざまな試みがなされている。
5) このほか、筆者と浙江省の友人との会話記録を見ると、"我已经报名了的(私はすでに申し込んだ)"や"刚才就是随便一问的(さっきは適当に聞いただけ)"のように、筆者と異なり、友人は文末に"的"を頻繁に使用する傾向が観察される。また、中国語の教科書を見ると、目的語の位置に指示詞を置く場合は"我吃这个(私はこれを食べる)"、"他买那个(彼はあれを買う)"のように、"这个(これ)"と"那个(あれ)"という省略のない形をとるべきとされるが、山西省の友人との会話では、"我最喜欢吃这，你喜欢吃这吗？(僕、これを食べるのが大好きなんだ。君は？)"のように、省略の形が使用されている傾向が観察される。

参考文献

【日本語文献】

石川慎一郎 2012『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房

ウィルスン, D. & ウォートン, T. 2009（著）今井邦彦（編）井門ほか（訳）『最新語用論入門12章』大修館書店

佐々木倫子 1993「会話の自然さについて: 日英対照研究の視点から」『国立国語研究所報告研究報告集』14: 361-401

崔春愛 2006「中国語における"也"について: 関連性理論の観点から」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1：31-38

崔春愛 2007「中国語の"也"と日本語の「も」の強調機能について: 関連性理論の観点から」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』2：25-35

周琳2007『発話解釈における中国語接続詞の認知的役割について: 関連性理論からのアプローチ』

奈良女子大学博士論文

ネウストプニー, J. V.・宮崎里司 2007『言語研究の方法: 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版

龐龍傑・堀江薫 2020「中国語の談話標識“这么说吧”と英語の定型表現 so to speak の対照：関連性理論の観点から」『日本認知言語学会論文集』20：308-319

【中国語文献】

曹丽英 2020<关联理论视角下的科技英语隐喻汉译分析>《现代英语》2：55-57

范新民 2019<关联理论下商务信用证文本中的英语长句翻译研究>《考试与评价》4:70-75

孔梁宇 2019<关联理论视角下的《人间天堂》两个译本的对比分析>《戏剧之家》23：199-200

李菁菁 2020<关联理论指导下的汉英格言翻译思考>《校园英语》26:248-249

李媛媛 2020<关联理论对新闻翻译中文化负载词的指导意义>《校园英语》38:248-249

孙舒怡 2021<从关联理论看生态文化负载词的翻译—以《墨子》英译本为例>《考试与评价(大学英语教研版)》1:52-56

【英語文献】

Austin, J. L. 1962. *How to do Things with Words.* Oxford University Press.

Culpeper, J. & Michael Haugh. 2014. *Pragmatics and the English Language.* Palgrave Macmillan

Grice, P. 1975. Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry Morgan, eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts.* Academic Press

Leech, G, N. 1983. *Principles of Pragmatics.* Longman

Searle, J. 1979. *Expression and Meaning : Studies in the Theory of Speech Acts.* Cambridge University Press

Sperber, D. & Deirdre Wilson[1986]1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.(1sted. 1986 / 2nded. 1995)

用例出典

『平成 20 年度日本語資料集』松村瑞子(編)「日本語母語話者間と中国語母語話者間の会話」安銀姫(著) 九州大学、2008 年 3 月

『平成 21 年度日本語資料集』松村瑞子(編)「日中のクレーム交渉談話」故敏男(著) 九州大学、2009 年 3 月

『平成 21 年度日本語資料集』松村瑞子(編)「日中の自然談話における不同意」王萌(著) 九州大学、

2009年3月
『平成22年度日本語資料集』松村瑞子(編)「中国語・日本語会話に見られる世代差」王丹丹(著) 九州大学、2010年3月
『平成22年度日本語資料集』松村瑞子(編)「中国語自然会話に見られる依頼に対する『受諾』と『断り』行為のストラテジー」 陳陽(著) 九州大学、2010年3月
『平成23年度日本語資料集』松村瑞子(編)「日中医療場面の会話データ」王建波(著) 九州大学、2011年3月
『平成30年度日本語資料集』松村瑞子(編)「20代～50代の中国語母語話者による自然談話」王欣(著) 九州大学、2018年3月